

眉村卓

TOKUMA NOVELS

長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー

1

〈エレスコブ家
護衛員〉





TOKUMA NOVELS

眉村 卓

不定期エスパー① 〈エレスコフ家
護衛員〉

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

©Taku Mayumura 1988

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 磯谷 励〉

ISBN4-19-153708-3

眉村卓

TOKUMA NOVELS 長篇青春冒險ロマン

不定期エスパー

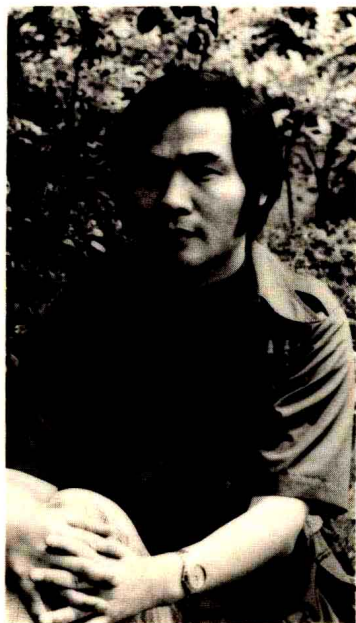
1

〈エレスコブ家
護衛員〉



-3 C0293 P700E(1) 定価=700円
(本体=680円)

不定期エスパー^{ふていき}
1・眉村卓^{まゆむらたく}



『SFアドベンチャー』一九八一年一月号。
定期エスパーの、記念すべき第一回が掲載
された。以来、回を重ねること七九回（一九
八年八月号現在）、七年弱の大長篇となった。
ち論、現在も進行中である。今、眉村卓は、
の大河の流れの如き物語を、どのように終
に導くか、頭を悩ませ始めているところだ。

TOKUTOMI NOVELS



長篇青春冒險ロマン

不定期エスパー
1
〈エレスコブ家
護衛員〉



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

エレスコブ家

7

護衛員

118

本文插画・小林智美

エレスコブ家

モリス・ウシエスタは、はじめからぼくを憎んでいたのだ。ぼくがエレスコブ家の警備隊の一員となつたときから、そうだったのである。

ぼくがエレスコブ家に雇われることになったきっかけは、ファイター訓練専門学校の公開卒業戦闘であつた。

ファイター訓練専門学校の公開卒業戦闘には、たくさんの人が見物にやって来る。戦闘がショーとしても面白いからだ……一部の人は、それだけが目的ではない。ファイター訓練専門学校の学生たちは、在学习中に半分以上、身のふりかたが決まってしまう。入学時に、すでにどこかの「家」から送り込まれている者もあるし、訓練の途中で目をつけられてスカウトされる者もいるからだ。

ぼくは、公開卒業戦闘のときも、まだ、どこへ行くとも決まっていなかった。これは、ぼくの成績が悪か

つたためではない。ぼくは訓練所では首席とまでは行かなかったが、一応、いつもトップグループの中にいた。だからぼくに対する勧誘は、すくなくなかったのだ。いろんな有力な「家」からの、警備隊に入らないかとの誘いや、プロのファイターとして戦闘興行のメンバーにならないかという申し出は、五つや六つではなかったのである。

それなのに、ぼくが……別に遊んでいて暮らせるほどの財産もなかったぼくが、自分の行く先を決めなかったのは、ぼく自身の奇妙な能力、生れついて持っている体質に、不安を抱いていたからであつた。

ぼくは、不定期エスパーだつたのだ。

不定期エスパーをご存じだろうか？

エスパーといえば、誰でも知っている。読心力や透視力、念力とか未来予知といった力を、ときにはひとつだけ、人によってはその全部を持っている連中だ。

エスパーが、今の世界で優遇されているかとなると、ぼくには何ともいえない。一面ではたしかに相応の待遇を受けているが、半面、エスパーであるがために、仕事の種類も制限され、管理されているのも事実であ

る。これは、わがネブトード連邦の体制にも関係があった。ネブトード連邦は十四のネイト——主権体で構成されており、共和制で、個人個人の自由や権利を保障している。他の星間帝国や星域連合体などくらべると、間違いなく民主的で、開かれた社会なのだ。が……そうした体制であるがゆえに、個人個人はおのれの権利を主張する。そんな中に置かれた、遺伝的特質によるエスパーたちは、個人の自由やプライバシーを侵しかねない厄介者なのであった。とはいえ、エスパーたちのほうにもまた、社会の成員としての権利がある。だから大半のネイトでは、エスパーが他の人々と違うおのれの能力を行使する、そのことは原則として咎められないが、他人に迷惑を及ぼしたり、エスパーとしての能力によって知った秘密をみだりに洩らすのは、きびしく禁じられていた。また、エスパーであることによってきわめて有利になる場や、競争に加わるのも、許されなかった。それはつまり、そうしたネイトの為政者が、エスパーでない大多数の人々の意向を受けたということでもある。もしもそういう定めを作らなかったら、へたにおのれの能力を駆使したエスパー

ーは、人々のリンチに遭ったかも知れないのだ。そして、この結果、エスパーは職業の選択上、まことに不利な位置を与えられることになった。人間どうしのコミュニケーションにもとづく高度な技術の仕事は、医師などの一部以外は駄目であった。他の人々との公平を欠くからというのである。それに、学校教育においてもハンディキャップを背負わねばならない。カンニングが効果のあるテストは、受けてはならないとなると……おおかたの学校へは行けなくなる。中にはエスパーのためだけのコースを設けたところもあるが、ごく少数であった。設備に手間がかかるし、教えかたも変えねばならない。それにエスパー以外の学生たちが、同一基準で成績をつけられるのを拒否しがちだからである。ならば、エスパーのためだけの学校があればいいではないか、となるとところだけでも……そういう学校は設立の段階で、種々の圧力によって潰されたし、運良く開校にこぎつけても、そこがエスパーのための学校だと判明するや否や、しつこい嫌がらせをされ、石を投げられて、廃校となるのがおちだったのだ。

エスパーがどうしてこんな目に遭わなければならな

いのか、と叫ぶ人たちは、もちろんいいわけではなかった。当のエスパー以外にも、そう主張する者はあったのだ。エスパーはある意味では社会の財産であり武器である。それなのになぜか、というわけだが……かれらの声が世の中に受け入れられる可能性は、すくなくともここ十年や二十年はなさそうだった。エスパーは少数者だったが、少数者である以前に、優者だと人々に思われていたからである。かれらは優者なのだから、その優越性の上に、さらに何かをプラスする必要はない。現にエスパーたちは今のままでも、かれなりに適当にやっているではないか——というのが、世間の考えかたであった。エスパーに限らず、優者とか恵まれた者に対しては、公平を要求しみんなと同列になることを要求するのが、いわゆる民主政治——といつて悪ければ、こういう状況に來た民主制での一般的現象である。大多数は、自分たちよりぬきん出た存在を許さない。ぬきんでようとすれば寄つてたかつて足を引っ張り、引っ張つても駄目な場合には、正義の名によつてハンディキャップを負わせるのだ。内心、これは良くないことだと思つていても、みなから仲間

外れにされるのがこわいので、同調するのである。

これは……ある意味では、もつたない話であった。エスパーの能力を活用すれば、これまでには出来なかつたような、大きな、画期的な研究や仕事の実現するかも知れない。現に、ネプトーダ連邦以外の星間帝国や星域連合体では、積極的にエスパーを登用しているとの噂であった。エスパーゆえに高位高官にのぼり、特別な待遇を受けて働く者もすくなくないという。ただ……だからといつて、そうしたエスパーたちが幸福かどうかとなると、何ともいえない。エスパーを利用しているのは、おおむね独裁体制かそれに近い帝国・連合体であつて、そこではエスパーは特殊能力者として、機械同様に扱われ、酷使されているというのである。(ネプトーダ連邦のマスコミはそう報じていた)人間として扱われる前に、エスパーとして利用されているだけだというのだ。それに引きくられば、われわれはエスパーを、ちゃんと人間として扱っている——というのが、ぼくたちの世界の一般的な声なのであつた。

エスパーたちがこうした立場にあるとなれば、みず

から進んでエスパーの能力を放棄する者が出て来ても、不思議ではない。脳に簡単な処置をほどこし催眠術にかけるだけで、人格や感情や記憶のいっさいを傷つけずに能力をなくせる技術が確立されて以来、多くのエスパーたちが転向した。今でも転向する者はあとを絶たない。いうまでもなく、これは個人の自由意志で手術を受けるので、決して強制されることはない。エスパーはいずれを選ぼうと勝手なので、これがネプトラダ連邦の自由であり寛容さなのだ、ということになっている。

ぼくの父は、そうした元エスパーで、母は非エスパー——普通人であった。父は技術官僚を志し、そのための上級学校へはエスパーでは行けないので、手術を受けたのだ。父の両親は普通人だったから、そうすることをむしろよろこんだらしい。話によると父の父のその母がエスパーだったそうで、父の場合、その因子がよみがえって来たのであろう。父の祖母の時代にはまだエスパーの能力除去手術法は発明されていなかった。それで、彼女は一生をエスパーで終えたはずだ。はずだ、というのは、父の祖父と祖母は、離別したからで

ある。エスパーと普通人は、熱烈に愛し合っている間にもかく、秋風が立ちはじめると逆に憎み合うようになることが多いという。その典型的な例だったのだろう。ついでにいつておくと、ぼくの父はエスパーでなくなつてから母と知り合い、結婚したのだ。母はときどき父に、あなたがエスパーだったらわたしのこの気持ちもわかるでしょう、といっていたが、もちろん本心からではなかった。言葉のあやに過ぎなかったのである。

そういう家系のひとりっ子として生れたぼくは、五歳ごろまで、普通の人間と思われていた。エスパーの発現は、単純な遺伝子の優性・劣性では論じられない。エスパーたる能力を持つには、十数種類の因子が関係していて、その組み合わせの型によって決まるという。だからぼくは、当り前の子供として育つて来た。

五歳になったある日、ぼくは突然、父と母の心の中を読んでいて自分を発見した。父も母もぼくに対しては、純粹な愛情を抱いていたのはさいわいであつた。もっと複雑で愛憎のからみ合つた家庭に育っていたら、ぼくはテレパスになつたことで、自己嫌悪におちいり、

人間嫌いになっていたかも知れない。それでも自分以外の人間の心がわかるというのは、こわいものである。ぼくは泣きながら母にそのことを訴えた。父と母は顔色を変え、ぼくを専門家のところへ連れて行った。

「あなたがたのお子さんは、テレパス——読心力者ですな」

と、専門家は、精神波感知機を覗き込み、ぼくとの問答を済ませると、いった。「読心力以外の能力があるのかどうか、それはまだはっきりしませんが……とにかく、エスパーであるのは、たしかです」

「でも……この子は……イシターは……今まで何でもなかったんですよ」

母が抗議した。

専門家は、父母の家系をたずね、それからぼくをさらに大型の感知機の前に立たせて、いろんな質問をし、反応を調べた。そのときの専門家の心中にあったものを、ぼくはいまだにはっきりと覚えていいる。混乱と疑惑……エスパーへのおそれと、それに重なり合ったかすかな軽蔑……。専門家は、しばらく考えてから、答えたのだ。

「この能力は、一過性のものかも知れません。おたくのような家系では、成長途上にいつとき、エスパーになる者が現われるのです。その場合、これは、一週間か二週間だけつづいて、それでおしまいです。あとは、一生、エスパーとしての能力は出て来ません。ごくまれに、例外がありますが」

「例外とは……どういうことですか？」

父が訊いた。

「不定期エスパーですよ。ご存じですか？」

と、専門家。

「ああ……。聞いたことがあります」

父が頷き、母のほうは不審げに専門家を見た。

「不定期エスパーとは、あるとき何の前ぶれもなしにエスパーの能力が現われ、それが何時間なり何日なり何カ月かなり持続したのちに、また普通人に還ってしまふ人たちです」

専門家は、母に向かって説明した。「いつエスパーになり、いつ普通人になるか……それがどの位つづくのか、本人にもわかりません。おそらくそうした人々は、エスパーと普通人の境界線上にあって、体調や感

情の変化、さらには自己暗示などの影響で、両者の間を行ったり来たりするのでしょう。このメカニズムはまだ解明されていませんが……そういう人たちがごく少数ではありますが存在するのは事実です」

「……………」

「この不定期エスパーは、普通人であるときに、それと検出するのは不可能です」

専門家はつづけた。「世間でいわれているように、きわめて優秀なエスパーは、普通人を装う能力を持っています。自己の力を抑制し精神波を出さないようにするのですな。しかし、これは長くは保ちません。何かあると反射的に力を使ってしまうので……ほんの五分か十分で、感知機に反応が出てしまいます。感情制御の修業をしたエスパーは、何時間でも正体を現わしませんが、それでも眠ってしまうと制御は出来なくなり、エスパーであることがたちまち判明します。ところが、不定期エスパーが普通人の状態にある場合は、ただの普通人です。どんなにしても検出不能なんですよ」

そんなわけで、父母は、ぼくが一過性の発現なのか不定期エスパーか不明のまま、ぼくを連れて帰ったの

だ。

ぼくのそのときの読心力は、一週間も持続しなかった。たしか、四日か五日で、ぼったりと消えてしまったように記憶している。

その後長い間、ぼくにはエスパーとしての能力は現われなかった。父も母も、あれはやはり一過性のものだったのだろうと判断し、安心もして、ぼくを官僚になるための予備技術学校へ入れたのである。

予備技術学校で、ぼくはよく勉強した。教えられることは真面目に学んだけれども……ぼくの関心は、政治や社会のほうにも向いていた。これは自分がエスパーとは無縁でない立場にあり、エスパーの社会的待遇に疑念も持ったせいだ、いやでもそちらの方面のことを考えてしまうようになったからである。

予備技術学校をあと少しで卒業というときに、ぼくは再び、エスパーの能力が起きあがって来たのを知った。同級生と議論をしていて、相手がぼくの成績をそねんでおり、悪意だけでののしっているのを感じたぼくは、衝動的にそいつを椅子ごとひっくり返したのだ。それも、自分の手ではなく、怒りをぶっつけた

——念力によって、であった。ぼくがエスパーだった（周囲の人間にとっては、そうだったろう）ということ、あつという間に知れ渡り、ぼくは教務室に呼び出され、わざわざ運び込まれた精神波感知機の前に立たされた。ぼくは自分が、そのときまではエスパーでも何でもなかったことを主張したが……立証は出来なかった。不定期エスパーかも知れないと学校当局も専門家も認めたものの、エスパーでありながらそれを隠していたのではないか、という疑惑は消えなかったのだ。たまたまその前のテストで、ぼくが抜群の成績をあげていたのも、不利に作用した。ぼくはエスパーの能力を使って不正行為をしたのだと判定され……退校処分になったのだ。

不幸な事柄は、とかく重なりやすい。

ぼくが予備技術学校を放り出された直後、父母は交通事故死した。即死だった。百キロ以上離れた場所にいたぼくは、父母の痛みと驚きを感じ取って、悲鳴をあげた。それがお別れだったのだ。即死でなければ、ぼくは父と母のぼくに対する気持ちを受けとめていたかも知れない。これは残念なことである。が、また一

方、ふたりの死への苦痛を何分も何時間も共有していたなら、エスパーであることにろくに馴れていなかったぼくは、精神的に変調を来していたであらう。ただ……このとき、ぼくは、エスパーであるというのは、あきらかに普通人とは別の存在だと、悟ったのである。

両親を喪ったぼくは、自活の道を考えなければならなかった。それに、今後のことを思えば、エスパーとしてではない特技を何か身につけておくのが望ましい。ぼくは身体が丈夫で、運動神経も鈍くなかった。だから……ファイター訓練専門学校の試験を受け、合格したのだ。体力と反射神経と技がものをいうファイターには、当人がエスパーであらうと否と、ほとんど関係がない。それはたしかにエスパーなら、対戦相手がどこを狙っているか読み取ったり、念力で武器を飛ばし回収することも出来る。一見、エスパーは有利となりそうだが……違うのだ。いささかでもファイターの真似ごとをした人なら、よくご承知だろうが、こういう状況では、鍛えられた神経と身のこなし、それに体力のほう、ずっと速いし、有効なのである。エスパーの能力を使って、これはこうだからこうしよう——

と計算し、行動に移そうとしたときには、すでに反射的・本能的に動いた敵の電撃剣か、敵の身体そのものが、こちらにダメージを与えているのだ。それがわかつているからこそ、ファイター訓練専門学校は、普通人やエスパーの区別なしに、体力テストでパスした者を迎え入れているのだった。ぼくが入学したのは、そのためだ。そして、ファイター訓練専門学校は、ネイトに役立つ人間を育てるという（これは、いうまでもなく、番犬としてのファイターのありようを示していた）目的上、学費は無料で、給料さえ支給される。この点も、ぼくには有難かった。

入学時に、ぼくは定めに従って、自分がエスパー、それも不定期エスパーである旨を登録した。在学中、何度か普通人になったりエスパーになったりしたが、それはいつ到来し、いつ消失するか、自分でも全く見当がつかなかった。学校にはほかにエスパーが何人かいたけれども……かれらはぼくが不定期エスパーであるのを知っており、テレビシー会話が通じたり通じなかったりするそんな中途半端な奴とは、安心してつき合えない（と、かれらは心でその気持ちをぼくに伝

えたのだ）そのせいで、ぼくと格別親しくなろうとはしなかった。

ファイター訓練専門学校の学生としての毎日を送りながら、しかしぼくには、自分がエスパーであるがために進むことを許されなかった分野への未練も残っていた。だから訓練の余暇には、技術のことや政治経済、社会のありようなどについて、自分で勉強したものだ。

公開卒業戦闘で、ぼくは、同じクラスのイサス・オーノと対戦した。最終戦の三つ前の——Aランクの試合である。このランクは電撃剣でたたかうのだ。

イサス・オーノは、強敵だった。練習で何度も手合わせしたぼくは、よく知っていた。ぼくは先端が明滅する細身の剣を顔のところに挙げて待ちながら、イサスを見た。ぼくと同様、薄い保護衣をつけたイサスは、にやりと笑ってみせた。

はじめ！ の合図と共に、ぼくは剣を突き出し、上段からa b c dの打ちと突きを送った。むろん、これは一種の挨拶に過ぎない。イサスは型通りぼくの剣を受け流すと、今度はむこうから踏み込んで来た。b c

——からだ。これがイサスの得意手のb c eからc'の速攻であるのを、ぼくは知っていた。c'をかわそうとして、ぼくは反射的に相手の剣をはねあげていた。イサスは、いつものb c e'ではなく、b c e bの変形を選んだのだ。そのときのぼくはエスパーではなかった。純粹に反射運動でかわしたのだ。エスパー時だったら……いや、ぼくはそうでなかったからこそ助かったのを悟った。イサスは、ぼくが不定期エスパーであることを知っている。だからこの瞬間、ぼくがエスパーであるかもわからないと仮定し、相手がエスパーであってもいい作戦に出ているのだ。イサスはときどき、ぼくや、他の常時エスパーに対して、そうした作戦をとった。つまり……意識の中では攻撃の型を想定しながら、肉体が全く別の動きをするという攻めかたを持っていたのだ。鍛えあげたファイターにとっては、その程度のことをマスターするのは、さほどむづかしくはない。エスパー時なら、観衆を前にして多少あがっていたぼくは、ひっかかっていたであらう。

そう気がつくのと、ぼくは瞬時にして落ち着き、冷静になった。小型スタンドにひしめく観衆の顔も、よく

見えるようになった。

「それでは、お返しだ。イサス・オーノ」

ぼくは叫び、このときのために練りあげた打ち込みを開始した。それは六動作をワンセットにした攻めで、組み合わせを変えながら四回、連続していた。ただし、この四回を完了すると、ぼくの身体はほとんど無防備になってしまふ。いつてみれば勝つか負けるかの賭けである。三本勝負ではじめからそんな真似をするのは、無謀かも知れない。手の内を見られてしまったら、あとは、もっと水準の低い手しか使えず、圧倒されて、やられてしまふだろう。だが……ぼくは、勝つにしろ負けるにしろ、まず一本を取りたかった。ぼくがエスパーであり得るせいで、ひっかけようとしたイサスに、正面から攻め立てて出鼻を挫いてやりたかったのだ。

剣が閃き、ぼくは前進しつつ打ち込んだ。イサスはあざやかに受けて後退する。第一の六動作で、ぼくは円形の闘技場の中心まで盛り返し、第二のセットで、イサスをコーナーに追いつめた。何も考えなくても自動的に剣と身体が動くようになっていたぼくは、さら